



沢田内科医院 ニュースレター

第 87 号

弘前市医師会看護専門学校へ3人が入学

4月4日は看護専門学校の入学式でした。准看護学科に79人、看護学科に40人が入学しました。沢田内科医院からは、准看護学科に丸岡美穂子さん、看護学科に木村友美さん、斉藤優香さんの3人が入学しました。他に3人が在学していますので、沢田内科医院の職員が6人在籍しています。

准看護学科に入学した丸岡美穂さんは、市内のホテルで働いた後、心機一転、看護専門学校に入学しました。入学式の際、「ピッカピカの1年生だね!」と言ったのに対して、「くすんでますけど!」と答えてくれました。でも、私にはピッカピカに見えます。社会人経験が何年かは公表しませんが、さすがに、落ち着いて患者さんに応じて仕事をしています。きっと、患者さんに優しい看護師になること間違いありません。

木村友美さんと斉藤優香さんは3月に准看護学科を

卒業した、ピッカピカの准看護師です。1月から資格を必要としない看護技術をしっかり勉強してきました。3月に資格試験に合格して准看護師になると、注射や採血などのトレーニングを始めました。たくさんの経験を積んで、何でもできるようになるにはそれほど時間はかからないようです。



左から、木村友美さん、斉藤優香さん、相馬知香さん、三上千紘さん、丸岡美穂子さん(立っている人)、棟方孝奈さん

4月4日の入学式は1時間半ほどで終わりましたので、准看護学科2年になった棟方孝奈さん、看護学科3年になった三上千紘さん、相馬知香さんも加わって6人でびっくりドンキーへ行きました。いつものことですが、話は途切れることもなく延々と続き、看護専門学校での勉強や生活のことなどをいろいろ教えてもらいました。

話をするというより、話を聞いていて参考になることがたくさんありました。私は看護専門学校副学校長としての役割もありますので、これからの研究テーマも頭に浮かんできました。その一つが看護技術や手技で統一されていないものがあり、学生が混乱していることです。採血手技にしてもどれがベストとは言えませんが、教育現場では何らかの基準、あるいは指導者の意思統一が必要だと思いました。

現在、沢田内科医院には常勤の看護師が10人、看護学科に在籍する准看護師が4人、准看護学科に在籍している学生2人と、16人の看護職員が働いています。開業して今年で20年になりますが、開業当時と診療内容が変わってきています。学生でなくても新しい知識や手技を身につけて対応しなければなりません。勉強には十分な機会があります。こんな環境でいろいろな経験をして一人前の看護師となってもらいたいと思っています。



びっくりドンキーでいつものようにふざけながら

藤田すみ子さんと田中亜希子さんが退職

開業当時から清掃職員として働いてきた藤田すみさんは、私よりも1歳年下ですが、体力的に自信がなくなってきたとのことで退職することになりました。毎日、朝早くから働いてくれて本当にありがとうございました。

医院にはいつも患者さんがいます。患者さんがいる中で清掃をすることができませんので、藤田さんは朝7時に出勤して、外来診療に差し支えないように掃除をしてくださいました。外来の掃除が終わると病棟の清掃です。お風呂の準備もしなければなりません。いつも、患者さんの診療の邪魔にならないようにと気を配りながらの仕事です。駐車場など外の掃除もあります。ちょっと離れた所には職員駐車場もあります。

開業以来、医院の増築を2回行いました。駐車場も2ヶ所増えました。その度に藤田さんの仕事の範囲が増えてきました。この何年か、めまいなどで仕事ができなくなることが時々ありました。血圧の薬も飲み始めました。こんな状況を知っていますので、退職したいというのを止めることができませんでした。

田中亜希子さんは弘前市医師会看護専門学校を卒業



最後の仕事の後に外来でみんなと

し、弘大附属病院へ就職しました。優秀な成績で卒業しましたので当然のことですが、悠々と看護師国家試験を突破しました。国家試験が終われば、もうペンは持たないなどと言っていましたが、大学病院の新人ですから、ペンを持ちながら勉強の毎日だとのことでした。

清掃職員として山城ゆかりさんが来てくれました。藤田さんが退職する前に、2週間ほど一緒に働いて申し送りを受けていました。山城さんは他のところで清掃の経験があります。朝7時からお昼まで5時間勤務ですので、なかなか顔を合わせる時間はありません。次の機会にでも、写真も含めて紹介いたします。

3月20日はふたりの最後の仕事の日でした。出勤していたみんなから花束をもらい、短いアーチのトンネルを通過して沢田内科医院をあとにしました。



向って私の左が藤田すみ子さん、右が田中亜希子さん、その右が山城ゆかりさん

小堀未希先生誕生！！

4月22日に小堀未希先生が誕生しました。弘前市医師会看護専門学校の非常勤講師として准看護学科学生に対して講義を始めました。最初は内分泌疾患と糖尿病代謝疾患だけとの話でしたが、何と、腎泌尿器、脳神経、アレルギー免疫の分野も担当することになりました。

特に、腎泌尿器科は沢田内科医院の仕事とはもともと遠い分野です。膀胱炎、腎盂腎炎、尿管結石、せいぜいこんなものです。そこで、ESTクリニックの工藤誠治先生にお願いして、主に透析について勉強してきました。本では知っている透析の原理や器械のことなどを教えてもらい、血液透析や腹膜透析を実際に行っている現場を見せてもらいました。

弘前市内で透析を受けている人の概数は、鷹揚郷腎研究所弘前病院で550人、弘前中央病院で100人、ESTクリニックで170人とのことです。日本全体では、透析患者さんは約30万人です。糖尿病で腎不全になる人が一番多く、年間17,000人が透析を開始しています。学生にはこんなことも含めて臨床の空気を伝えることができるようになったと思います。

小堀さんは、もちろん学生として講義を受けたことはありません。

すが、その講義がどのようにして準備されたものであるかは知りません。講義内容を最初から自分だけで考えて構成することは簡単なことではありません。そこで、どんな内容にすると学生が興味を持って聴いてくれるかを私の経験からアドバイスし、笑いを誘ったりする場面も散りばめて、一緒に構成を考えました。

文字だけの教科書だと面白くありません。幸い、最近はインターネットでいろいろな情報がすぐに手に入ります。そこで、小堀さんが独自に作ったテキストにしたがって、解説用の画像だけのスライドを作ることになりました。そして、臨床現場の話をするので、教科書や文字が主体の資料を使ったこれまでの講義とは全く違った構成になりました。学生たちは居眠りもせずに聞いてくれること間違いありません。



初の講義を終えて看護専門学校の前で

最初の講義の後で状況を聞いてみました。そうしたら、眠っていた学生が一人いたようです。どんな面白い講義でも、90分もやられると眠くなるのが普通だと思うんですけど、小堀さんは、何時間もかけて作った講義だから眠らずに聴いてくれることを期待していたようです。世の中、そうそう自分の思い通りには動いてくれないものなんです。

看護専門学校を卒業してまだ4年ですので、臨床経験が豊富というわけではありません。講義を通じて、学生たちに臨床現場で行われていることが少しでも伝わり、看護を勉強しようという気になってくれような講義をすることを期待しています。



ESTクリニックでは工藤誠治先生が丁寧に教えてくれました。

内視鏡検査による胃がん検診

特定健診や家族の健診は、勤めている人の会社の健康保険組合、小さな勤務先では協会けんぽ、その他は弘前市の国保が行います。これに対して、がん検診は市町村が行います。保険証が弘前市国保の人は、特定健診は国保年金課が行い、がん検診は健康づくり推進課が行っています。どちらも弘前市医師会健診センターが行っていますので、表面上は同じなんですけど、いろいろ複雑なんです。

昨年、沢田内科医院では大腸がん検診を1,228人に行いました。便潜血検査キットは沢田内科医院に持ってきますが、検査は弘前市と契約した弘前市医師会健診センターで行い、結果は郵送で通知します。検診ではなく、病気を疑った場合の便潜血検査はこれとは別に沢田内科医院で行っています。

弘前市が行う胃がん検診はバリウムを使ったX線検

查で行っています。内視鏡検査で胃がん検診を行うことはできません。胃内視鏡検査は、お腹が痛い、胃や十二指腸に病気が疑われる、胃がんが心配だ、などの時に行います。一部の勤め先の会社の検診や西目屋村ではできますが、内視鏡検査で胃がん検診はできないのです。

その理由は、内視鏡検査で胃がん検診を行い、死亡率が下がったということが証明されていなかったからです。X線検査での胃がん検診の精密検査は胃内視鏡検査で行いますので、不思議に思うかもしれませんが、集団でのデータがなかったのです。

この4月に国立がん研究センターから、胃がん検診を内視鏡検査で行うことが妥当であるという政策提言がなされました。これまで、日本で公表されたデータや韓国で行われた胃がん検診の結果から、内視鏡検査により胃がん検診では、X線検査と同様に死亡率が減少するということが確認されたからです。これを受けて、厚生労働省で検討され妥当であると認められれば、内視鏡検査による胃がん検診が行われることになります。

弘前市医師会では、内視鏡検査による胃がん検診が行われるということを見越して、昨年12月から準備を始めました。アンケートの結果、弘前市では年間約20,000件の胃内視鏡検査が行われていることが分かりました。開業医で約1万件、病院で約1万件です。沢田内科医院では昨年1年間で約1,800件でした。



内視鏡検査による胃がん検診には約30の医療機関が参加する予定です。がん検診はダブルチェックといって二人の医師が判定することになっています。弘前市では、個別の医療機関で行った内視鏡画像を医師会に集め、検査を行った医師の他に消化器内視鏡専門医がチェックし、より精度の高い結果が出せるように計画しています。

日本では、年間約13万人が胃がんになります。男性が9万人、女性が4万人と男性が女性の約2倍です。弘前市では胃がんの発症数は分かりませんが、毎年95人が亡くなっています。死亡数ですが、やはり男性が女性の約1.5倍です。

弘前市で昨年10月から行っている胃がんリスク検診の結果をみると、ピロリ菌の感染率は男女差がありませんでした。大部分の胃がんの原因がピロリ菌だとしても、塩分、お酒、たばこなど、生活習慣が大きく影響していることが分かります。また、どのがん検診にも共通なのですが、男性の方が女性に比べて受診率が低いのも死亡率が高い原因だと思います。つまり、病気が進んでから医療機関を受診する人が多いということです。

胃がん検診が内視鏡検査で行うことができるようになった場合、弘前市ではすぐにでも対応できます。ご期待下さい。なお、内視鏡検査が行われるようになって、バリウムでの検診がなくなるわけではありません。胃がんリスク検診もできます。胃がんで亡くなる人ができるだけ少なくなりたいと思っています。

山中春光先生が研修に来ています

弘大附属病院の臨床研修医の山中春光先生が5月1日から30日まで研修します。医師になって2年目の先生です。1年目は弘大附属病院での研修でしたので、外来診察の経験がほとんどありません。

山中先生は板柳町出身で、山梨大学医学部を卒業しています。塾の先生をしていて、途中から医学部に入っていますので、ピッカピカの新人というわけではありません。津軽弁には苦労しますが、患者さんから情報を聞き出すテクニックを身につけることが目的です。

なお、院内限定ですけど、最終日に身長と体重から計算するBMIを当てる懸賞が懸っています。商品が何かはまだ決まっていません。



懸賞の投票箱を持つ山中春光先生